ヤンデレ機動六課

ユロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ機動六課

【Ｎコード】

Ｎ３０１９Ｚ

【作者名】

ユロン

【あらすじ】

ヤンデレな機動六課の面々を書いていきます。ヤンデレ好きな方ホイホイです。

ヤンデレヴィータ（前書き）

最初はヤンデレ要素はありません。

ヤンデレヴィータ

俺はダゴル・インフェン。あだ名はダゴン。機動六課に勤める青年だ。同僚の１人が俺の名前を間違えたとき、それが周りに広まってこうなった。

そんなある日、ヴィータに呼び止められる。

「おい、ダゴン…今夜お前の部屋に寄っていいか？」

「ああ…別にいいぜ？」

これといった用事もないのでとりあえず了承した。

「よし！じゃあ後でな。いっとくけどドタキャンすんじゃねえぞ…？」

一瞬ヴィータから不気味な雰囲気が漂った気がした。

「お、おう。」

俺は少しビビりながらも返事した。ヴィータはそれを聞くと行ってしまった。

その後、外にいた俺は六課に戻ると高町なのはに呼び止められる。

「あの…ダゴン君、今夜君の部屋に寄っていいかな？」

なのはが顔を赤くしながら聞いてくる。

「いや、ムリだな。大丈夫そうな日があったら連絡するから待ってて。じゃ。」

俺は早歩きでその場を離れる。

「え…ちょっと待って」

その声を無視してさらに早足になる。正直彼女は苦手なのだ。

仕事が終わって部屋に戻った頃には夜になり外は真っ暗になった。するとドアをノックする音がした。

「あたしだ。」

ヴィータの声だ。

「はーい今開けまーす。」

若干棒読みで返事をすると。目の前にネグリジェ姿のヴィータがいた。

「その格好は…？」「何でもいいだろ？」

ヴィータは答えなかった。

「まあこんなところで立ち話ってのもなんだな。入って入って。」

俺はヴィータを優しく招き入れた。

俺は後にこれを後悔することになる…。

ヤンデレヴィータ（後書き）

感想などいただけると嬉しいです

ヤンデレヴィータ2（前書き）

ヤンデレ入ります

ヤンデレヴィータ2

ヴィータを招き入れた俺は彼女をイスに座らせた。

「ちょっとお茶淹れるから待ってて。」

「ああ。」

俺は互いの麦茶を用意した。それを飲み、ヴィータに問う。

「ところで、何でここに来たんだ？」

「それは…お前と寝たいから。」
「え…マジ？」

「ねえ…ダゴン君…」

俺が聞こうとする前になのはの声が聞こえた。何だか怖い。

「な、なのは…？どうしたの？」

俺は扉に近づき、恐る恐る聞いてみる。

「私の誘いを断ってたけど、私よりヴィータちゃんがいいの？」

扉越しでも恐い。ヴィータは震えている。

「ねえヴィータちゃん、ネグリジェ着てたよね。ダゴン君と一緒に寝る気？」

「別にいいだろ。こいつはあたしが部屋に来るのを認めてくれたんだから。」

怖くなくなったのか、ヴィータは怒りのこもった口調で話す。

「いや、それでネグリジェ着てくのか？」

俺は少しでも恐怖心を消し去るため、ツッコミに徹する。

「いいじゃねえか。どうせあの時『一緒に寝たい』って言っても断るだろ？だったらこうやって押し掛けちまえばいいって思ったんだ。」

どうすりゃいいんだよ。このまま2人とも帰すか？いや、ヴィータに悪いな…。

「私、今パジャマ姿なんだよ。一緒に寝ようよ？」

冗談じゃない。そんなことしたら社会的に死ぬ。

「お前なに言ってんだ？ダゴンと一緒に寝るのはあたしだ。」

ヴィータが反論する。

「一緒に寝ないなら私、ずっとここにいるよ？」

どうしても一緒に寝たいらしいな…

「それで明日に支障が出たらヤバいな…かといって一緒に寝るのも…。」

俺は深く考え込んでしまう。ラチがあかないので追い返すことにした。

「ヴィータ、なのは、2人とも戻れ。」

「「え？」」

「戻れ。」

2人とも驚くが俺は無感情な返事をする。

「何でだよ！」

「戻れ！！」

俺は威嚇するようにヴィータに怒鳴った。

「「わかったよ…」」

さすがに効いたか、なのははドアを離れたようだ。足音が遠ざかっていく。ヴィータも部屋を出ていった。

「これでいいんだ、うん。」

そして俺は眠りについた。

しばらくすると目が覚めた。

ややこしくなったとはいえ許可したヴィータを追い返すのは今になって思うと少し悪い気がした。

「後で埋め合わせするるか…」

俺がつぶやくと

「その必要はないぜ。」

隣から声がした。驚いてその方向を見るとヴィータが寝ていた。ネグリジェで。

「お前…なんでここに!?」

「いちゃ悪いかよ?本当は追い出した後で後悔してたんじゃねえのか?」

「ぐ…。」

図星なのでなんとも言い返せない。

「ていうかなんで隣に寝てるんだよ？」

俺が一番気になることを質問する。

「お前が大事だからだ。お前の事が好きなやつはきっと他にもいる。あたしはそいつらに負けたくねえ。お前が他の女と楽しく過ごしてるところなんか見たくねえ。」

ヴィータの話を聞いて少しゾッとした。ものすごい執念を感じたからだ。

「俺を好いてくれるのは嬉しいけど…そのために危害を加えるなよ？そしたらすぐ嫌いになるからな。」

「…ッ！？」

ヴィータは目を見開いてこの世の終わりのような顔をした。

「まあとりあえず今日は一緒に寝てやる。そのかわり他言無用だ。いいな？」

ヴィータの顔はいつもの表情に戻った。

「当然だ。追い返したってぜってー帰んねえからな。じゃ…おやす

み。」

ヴィータはすぐ眠りについた。俺も眠りについた。そういやなのははどうしようかな…？

ヤンデレヴィータ2（後書き）

次は別のキャラでやります

ヤンデレフェイト（前書き）

今回のヒロインはフェイトです。

ヤンデレフェイト

「疲れた…。」

その日、俺は事務の仕事をしていた。今日はだるい。そんな俺は机に突っ伏している。

「大丈夫？ダゴン君。」

俺に声をかけてくれるのはフェイト。優しくて美人な女性だ。

「なんとかね…生きてるよ。」

「あはは…ねえ、ちょっと話があるんだけどいいかな？」

「あとにして〜。」

俺はとてももだるそうに返事した。

「私と話すの嫌？」

フェイトの声のトーンが一気に下がった。そして俺を睨む。するとフェイトのケータイが鳴った。彼女はそれに出た。

「はい。はい…わかりました。」

フェイトは不機嫌そうに返事して電話を切った。

「どうしたの？」

俺は何があったのか聞いてみる。

「ちょっと用事ができちゃったから行くね。」

フェイトはそう言うと早足で去っていった。なんか一瞬すごく悔しそうな顔してたな…。

「んじゃ、落ち着いたし仕事再開といきますかね！」

俺は自分に言い聞かせるように仕事を再開した。

「ふうー。やっと終わった。」

俺は今日の仕事を終えた。外はもう暗くなりかけてる。

「ちょっとトイレ行くか。」

俺はトイレで用を足し、デスクに戻った。

「あ、パソコン消すべきだったな。省エネって大事だよね…ん？メールだ。」

パソコンにはメールが届いており俺はそれを開いた。

そこにはこう書かれていた。

『お疲れ様。あの時話したかったことを私の部屋で話したいんだけどいいよね？私と話すの嫌じゃないよね？

来ないなら君が寝てるところに私が行くよ？』

最後まで読んでゾッとした。ダルそうに返事したのがまずかったのか？とりあえず、返信するため、俺は送信の準備をする。

「メール読んでくれた？」

「ウェ！？」

突然横から声がして俺は驚いた。今のフェイトはなぜか怖い。

「それで、私の話聞いてくれるよね？」

誘いを断ったらまずいな…。

「わ…わかった！行こうか！」

「ふふっ、よかった。」

フェイトは笑顔になり、俺の手を掴む。

「え、ちょっと!?」

「じゃあ行こう。」

俺の反応を気にしないフェイトに引っ張られて彼女の部屋に案内された。

「へー、俺の部屋より少し広いな。ん…?ソファーがない。」

普通は机を囲うようにソファーが置かれているはずだが机の周りには何もなかった。わかりやすくいうと机しかない。しかもソファーがある事前提の机なのに。

「フェイト、ソファーは?」

俺は気になったので聞いてみる。

「かなり傷んでたから新しいのに取り替えてもらうことにしたの。明日には届くみたいだよ。」

「へえ~そうかそうか。」

でもこれだと立ち話になるな。座れるのは…ベッドだけか。

「立ち話もなんだし、ベッドに座って？」

「そうだね…っておい！」
ノリつっこみをする俺。

「いいから！」

俺はつっこみを無視されてフェイトに無理やりベッドに座らされた。
そして隣には彼女が座る。

「はぁ…で、話って何？」
早く終わらせて寝よう。なんかもう疲れちゃった。

「最近…私と話せてないよね。」

フェイトは俯きながら話す。声は震えている…？

「そういやそうだね。でもなんか問題ある？」

「あるよ！」

フェイトはベッドに乗って俺を後ろから力強く引っ張り、俺はベッドに仰向けになる形となった。隣にはフェイトが寝ていた。彼女は涙ぐみながら俺の目を見つめている。

「あ…えと…その…。」

俺はじっくりと見られて動けなくなった。これが，くろいまなざし，ってか！？

「ダゴン君とゆっくり話したいのに話せない、でも君は他の人たちと普通に話してる。私はいつも出張で…。悲しくて…悲しくて。」

フェイトは俺の後頭部を両手で包んで彼女の胸に当てる。

「あの…息…しづら…。」

柔らかいけど今はそれを味わってる場合じゃない。必死に離れようとするがその力は強い。

「嫌…離したくない！ここで離したらまたダゴン君が遠くなっちゃう！」

さらに力が強くなり、彼女の感情はかなり昂っている。

「ぐっ…いい加減にしてくれ！」

「えっ！？」

俺がキレたことに動揺してフェイトの力が弱まった。そのスキを見逃さず、俺はベッドから立ち上がって逃げ出した。

「え…待って！行かないで！」

何か聞こえたような気がするか気のせいだ。俺は自分に言い聞かせ走る。そして自分の部屋に着きベッドに突っ伏した。

「もう寝よう…。」

俺は意識を手放した。

「…ひっ…ぐすん…」

フェイトのすすり泣き声が聞こえたような…？

気のせい…だよな…

ヤンデレフェイト（後書き）

ダゴン「はあはあ…死ぬかと思った…。」

お疲れ〜。

ダゴン「次は誰になるんだ？」

まだ決めてない。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3019z/

ヤンデレ機動六課

2011年12月29日21時48分発行